

資料紹介

「高木幹朗研究室スライドフィルム」について

松本 和樹 (非文字資料研究センター 研究協力者)

はじめに

「船上生活者の実態とその変容に関する研究」共同研究班（第三期共同研究）は、2018年に『横浜港における船上生活者の歴史の変容—オーラルヒストリーからのアプローチ—』を刊行した。本稿では報告書第2部に収録した「高木幹朗研究室スライドフィルム」について紹介する。

高木幹朗研究室スライドフィルムは、神奈川大学工学部高木幹朗研究室が1970年代に数年間にわたり行った輪講「横浜の運河—都市の中の河川—」の成果の一つである。1970年代の横浜では、飛鳥田一雄市長の六大事業による交通網の整備が進んだ。高速鉄道建設事業として1972年に上大岡駅・伊勢佐木長者町駅間で開業した横浜市営地下鉄は、1976年に上永谷駅・横浜駅間まで開通した。また、高速道路網建設事業で、現在の首都高速道路神奈川1号横羽線、神奈川3号狩場線の建設が進んだ<sup>1)</sup>。これらの事業で横浜市や関係各局が目にしたのが、市街地を流れ、運河として活用された河川だった。河川とその周辺の開発が進むなか、高木研究室は

河川・運河を、人びとが水や川に対する親しみを深める「親水空間」として注目し、河川・運河の形成と歴史の変遷について、文献調査、定点観測、インタビューなどを行い、“運河のある風景”が大きく変貌し始めていることを明らかにした<sup>2)</sup>。この定点観測で撮影されたものが、今回紹介するスライドフィルムである。本稿では、画像全966点のうち、“運河のある風景”の変貌の局面を捉えた画像を中心に紹介する。(以下、画像の資料番号：T-○-△は共同研究班が付した番号で、Tは提供者の高木氏のイニシャル。○はスライドフィルム原本に付された番号で、75~79となっている。△は、75~79のスライドフィルムに収録されている画像の個別番号で、収録順に研究班が付した。)

1 変貌前夜の河川景観

スライドフィルムには、大岡川、派大岡川、堀川・中村川、吉田川・新吉田川、掘割川の各河川及び河川跡地について、橋を軸に定点観測した画像が数多く収められている。



図1 現在の横浜市街地と河川

(出典)「国土地理院地図/GSI マップ」(国土地理院)(<https://maps.gsi.go.jp>)をもとに筆者作成。

(注) 派大岡川、吉田川・新吉田川は埋め立てられているため、地図上に点線で流れを記し、河川名を( )で括った。また、高速道路建設により廃止となった吉浜橋、現在は別箇所に移転した横浜掖済会病院は橋名、病院名を( )で括った。





現在の横浜市の地図（図1）から、高木研究室が調査した各河川の位置と現在の状況を確認すると、吉田川・新吉田川は横浜市営地下鉄、派大岡川は首都高速道路の建設で埋め立てられ、堀川・中村川は上空を首都高速道路が通っている。ここでは、交通網の整備に伴い景観への影響が見られた（1）派大岡川、（2）堀川・中村川、（3）吉田川・新吉田川について、1970年代の変貌前夜の景観を見てみる。

### （1）派大岡川

T-75-1 は埋め立て前の派大岡川。掖済会病院、根岸線の高架と吉浜橋が見える。川に多くの船が繋留され、場所を少し移した T-76-54 にも繋留されている。



T-75-1



T-76-54

### （2）堀川・中村川

T-75-2 は石川町駅と中村川。川沿いに多くの船が不法に繋留され、状況は数年後も変わっていないが、右手前の派大岡川が堰き止められた（T-79-14）。



T-75-2



T-79-14

### （3）吉田川・新吉田川

横浜市営地下鉄の開通に伴い埋め立てられた吉田川・新吉田川では、阪東橋から関内方面に大通り公園の整備が進められた（T-76-99）。池下橋から阪東橋方面も更地だったが（T-75-118）、整備された（T-79-45）。



T-76-99





T-75-118



T-79-45

## 2 開発による河川景観の変化

六大事業で河川景観はどのように変貌したのか。首都高速道路の建設、大通り公園の整備に注目する。

### (1) 首都高速道路

T-76-50 は建設中の横羽線。右手に国鉄根岸線関内駅が見える。埋め立てられた派大岡川で大規模な建設工事が進められている。T-79-7 は 1978 年に開通した横浜公園出入口。T-76-52 と比較すると、画面右奥の石川町駅方面に向けて派大岡川が埋め立てられ、高速道路が建設されている。川に近づいて撮影した T-79-12 も、1 (1) の T-76-54 と景観が大きく変わっている。



T-76-50

埋め立て前後の様子は 1 (1) の T-75-1 とほぼ同地点の T-79-13 からわかる。



T-79-7



T-76-52



T-79-12





T-79-13

中村川上には狩場線の建設が計画された。これに対し、住民から強い反対の声があがった (T-78-129)。一方、池下橋付近では狩場線開通に向けた工事が進められている。日枝橋から撮影した T-77-47 と T-76-154 を比較すると、橋脚の建設で河川の半分が覆われている。



T-76-154

## (2) 大通り公園

横浜市営地下鉄の地上部に「緑の軸線構想」の一環として計画された大通り公園は、1978年に開園した。阪東橋駅から伊勢佐木長者町駅 (T-79-56) を経て国鉄関内駅方面 (T-79-62) まで带状に続き、水の広場、石の広場、みどりの森などが設けられた<sup>3</sup>。



T-78-129



T-79-56



T-77-47



T-79-62

### 3 日常生活の景観——商店街

スライドフィルムは河川流域で暮らす人びとの日常生活も活写する。その一例として商店街に注目する。

#### (1) 野毛都橋商店街ビル

終戦後、横浜最大の露店指定地域となった野毛では、桜木町駅周辺の都市整備で露店整理が進んだ昭和30年代も、依然として多くの露店が路上を不法占拠していた。これに対し横浜市長の飛鳥田一雄は、東京オリンピック開催までの露店の撤去を目指し、店舗を大岡川沿いの都橋・宮川橋間の旧荷揚場に移転することで露店と合意。1964年11月、2階建の共同店舗としてこのビルが完成すると、野毛を撤去した露店が店舗に入り、営業を開始した<sup>4</sup>。ビルは大岡川に沿って建てられ、1階店舗が道路、2階店舗が川に面している (T-76-113、114)。2016年、戦後建築として初めて横浜市の歴史的建造物に登録された<sup>5</sup>。



T-76-113



T-76-114

#### (2) 横浜橋通商店街

戦前に成立し、戦時下に商店街組合の解散、空襲で大きな打撃を受けた横浜橋通商店街は、戦後、伊勢佐木町などの繁華街が接収されるなか、真金町側に店舗が集合したのをきっかけに商店街となっていく<sup>6</sup>。T-77-35は商店街のアーケード。商店街と中村川に架かる三吉橋の間に三吉橋通商店街があり、川の袂に三吉演芸場がある (T-77-18)。1930年に開館した三吉演芸場は、銭湯草津温泉の貸席を大衆演芸の場として供したのが始まりとされ、戦時下の1943年に閉鎖。1950年に再開し、経営難を経て1973年に大衆演劇専門劇場として再出発した<sup>7</sup>。



T-77-35



T-77-18





### (3) 伊勢佐木町

戦前からの繁華街である伊勢佐木町は、1951年から接収が解除された後、昭和30年代になるとアーケードが建てられ、歩行者天国が実施されるなど、賑わいを取り戻しつつあった<sup>8</sup>。T-78-97では開港百年記念で造られた伊勢佐木町商店街入口のアーチ塔、T-78-96では1975年に開業したニューオデオンビルが見える。



T-78-97



T-78-96

### (4) マリナード地下街

横浜中央地下街（通称「マリナード地下街」）は1977年10月に開業した地下街（T-78-167）。伊勢佐木町



T-78-167

と馬車道の間地点の地下に、国鉄と地下鉄の関内駅、関内と関外を一体化する目的で作られた<sup>9</sup>。

### おわりに

高木幹朗研究室スライドフィルムは、1970年代の河川景観の変貌を、数年間の定点観測によってはつきりと捉えている。近年、戦後から現代に至る横浜を写した写真資料の公開や刊行が進み、その数は相当数に及ぶ（例えば、横浜市史資料室編『昭和の横浜 写真集』横浜市史資料室、2009年）。そのなかで、このスライドフィルムは、研究室による数年間の定点観測の成果という点で独自性を有している。スライドフィルムには、河川・運河沿いの家や商店、橋梁や新旧の様々な建造物が写されており、これらを手掛かりに分析することで、様々な成果も期待できる。

ただし、スライドフィルムを活用するには、課題も残されている。現在、スライドフィルムは全画像のデジタルデータ化が完了し、原本を非文字資料研究センターで保存している。本稿では、デジタルデータから開発年度や撮影場所、撮影対象が絞られる画像資料を中心に紹介したが、スライドフィルムを活用するにあたっては、一点一点の画像の撮影場所や年代等、画像に記録された情報をできる限り明らかにする必要がある。こうした作業を通じた画像の歴史的資料としての精度の向上は、今後の課題である。

### 謝辞

本稿執筆にあたり貴重なスライドフィルムを提供いただいた高木幹朗氏、また、金丸壽男氏に心よりお礼申し上げます。

- 1 横浜市総務局市史編集室編『横浜市史II』第3巻上、横浜市、2002年、351～369頁。
- 2 高木幹朗「運河のある風景 横浜の水辺空間」（『神奈川大学評論』2号、1987年）。同「横浜の「親水空間」—運河からみた横浜の都市構造とその景観—」（横浜市総務局行政部教育課『平成元年度横浜市地域研究費による成果報告書』、1991年）。
- 3 中区制50周年記念事業実行委員会編『横浜・中区史』、1985年、453～454頁。
- 4 青木祐介「都橋商店街ビル——野毛の戦後史が刻まれた共同店舗」（横浜市都市整備局都市デザイン室発行『歴史を生かしたまちづくり 横浜新聞』第33号、2017年）。
- 5 同前。
- 6 南区制50周年記念誌編集委員会編『南・ひと・街・こころ 南の風はあったかい』、1994年、135～136頁。
- 7 同前、137～138頁。
- 8 同掲『横浜・中区史』、446～447頁、456～457頁。
- 9 同前、455頁。